

■ 特別講演2

最先端医療と融合した新しい日本型医療の提言

北島 政樹（国際医療福祉大学学長）

漢方医学は伝統医学であるが、常に同じ医療を行っているわけではない。時代の変化、社会の変化とともに、伝統医学といえども形を変えながら進化していつている。特にわが国での伝統医学の新しい形への変化は動きが速い。

その理由には、西洋医学と一体化したわが国独特の伝統医学のあり方が強く影響していると考えられる。中国・韓国では医師ライセンスそのものが、二つに分かれているため、西洋医学と伝統医学がそれぞれ独自の発展を遂げこそすれ、お互いの影響はそう大きくない。日本の場合、明治の医制が敷かれた際に、わが国の伝統医学である漢方を制度的に残さない道を選んだ。医業試験の西洋七科が定められ、一時は漢方を継承する医師はほとんどいなくなった。

1970年代より、徐々に漢方が復興してきた。その理由として、1) サリドマイドに代表される西洋薬の副作用に対する危惧、2) 細分化された臓器別医療への不信、3) 検査にでない不定愁訴への対応の不満が挙げられる。しかしこれらは西洋医学に対するアンチテーゼであり、漢方の真の評価をしたものではない。

1976年に医療用漢方製剤が大々的に登場し、一部の医師多くの医師に用いられるようになり、様相は一変した。それまでは国民の支持はあっても一部の医師だけのものであった漢方のすそ野が大きく広がったのである。今では8割の医師が漢方を日常診療で用いるに至っている。

2001年の文部科学省が出した医学教育コア・カリキュラムに漢方が入ったことも大きなできごとであった。若手医師に漢方に対する違和感がなくなったことも漢方の発展のためには大きな出来事であった。

このように漢方を取り巻く状況は短期間の間にも変化している。このような変化は一つの医師ライセンスで、西洋医学も伝統医学も両方できるわが国ならではの特徴である。

処方の運用も、古典とは異なってきた。例えば大建中湯は『金匱要略』に「心胸中大いに冷えて痛み、嘔気によって飲食することができず、お腹が冷えて、頭や足であちこち突き上げる様に皮膚が盛り上がり痛み、手を触れる事も出来ない」とある。つまり冷えて腹痛があり、腸の蠕動運動が外からよく見えるような状態に用いるのが、古典的な大建中湯の使い方である。それから1800年経って、開腹手術後のイレウス予防に大建中湯を用いるなどと、誰が考えたであろうか。がん治療における十全大補湯や補中益気湯の使い方ともそうである。時代とともに、工夫していくのは、わが国の制度の利点でもあるが、こうした風潮は実は江戸時代からわが国で盛んに行われている。

香蘇散は『太平惠民和劑局方』にみられる風邪薬であるが、わが国では気剤としても用いられる。柴胡剤をストレス性慢性疾患に用いるようになったのも同様である。

わが国の医療は大概玄沢の採長補短説に代表されるように、良いものをどんどん取り入れ、時代に即して工夫していく自由自在な精神があるのである。

こうしたわが国の医療文化をさらに生かして、最先端医療と結び付けていくことで、世界に比類ない日本型医療ができるものと確信している。しかしながらまだまだ課題は多い。医療界全体として、大建中湯のような新しい適応を生み出そうという機運に欠けている。また、大学で漢方を扱うところが増えたといっても、きちんと西洋医学的にも評価されるような研究成果を出せるところはまだまだ足りない。教育に関しても教員の人材育成が遅れている。こうした基盤整備には国の支援も不可欠である。また、タミフルの例にみられるように生薬からの創薬は大きな潜在性を有しているが、わが国の生薬学の発展はこのところほとんど世界には示せてはいない。

伝統は時代に即して変化してこそ真の伝統である。わが国がもつ自由自在な柔軟性を生かして、漢方医学の近代化を推進することこそ、国民、ひいては世界保健への貢献ではなからうか。

略歴

昭和35年（1960）3月	慶應義塾高等学校卒業	昭和52年（1977）9月	杏林大学第一外科講師
昭和41年（1966）3月	慶應義塾大学医学部卒業（45回生）	昭和55年（1980）4月	杏林大学第一外科助教授
昭和42年（1967）3月	慶應義塾大学病院にて実施訓練終了	平成元年（1989）4月	杏林大学第一外科教授
昭和42年（1967）9月	第44回医師国家試験合格 （11月 医籍登録第194407号 取得）	平成3年（1991）4月	杏林大学退職
昭和50年（1975）3月	医学博士の学位を受ける（慶應義塾大学）	平成3年（1991）5月	慶應義塾大学外科学教室教授
昭和42年（1967）10月	慶應義塾大学医学部外科学助手	平成7年（1995）10月	慶應義塾大学病院副院長
昭和43年（1968）6月	足利赤十字病院勤務	平成11年（1999）10月	慶應義塾大学病院病院長
昭和44年（1969）6月	川崎市立病院勤務	平成13年（2001）7月	慶應義塾大学医学部医学部長
昭和45年（1970）6月	慶應義塾大学医学部外科学教室	平成19年（2007）4月	慶應義塾大学医学部名誉教授
昭和48年（1973）9月	足利赤十字病院外科部長		国際医療福祉大学副学長・三田病院病院長
昭和50年（1975）4月	Harvard Medical School & Massachusetts General Hospital 外科フェローとして2年間留学	平成21年（2009）6月	国際医療福祉大学三田病院長退任
			国際医療福祉大学三田病院がん治療研究センター長
			7月 国際医療福祉大学学長
昭和52年（1977）8月	慶應義塾大学退職		